

・作品タイトル『リフレクション／鏡と鏡』

・元にした作品のタイトル：作品ではありませんが、左記の实在の事件に着想を得ています。
AIとの禁断の恋——その先にあったのは死” 「息子が自殺したのはチャットAIが原因」
米国で訴訟 “感情を理解するAI”の在り方を考える

<https://www.itmedia.co.jp/aiplus/articles/2410/31/news106.html>

・著者名：田中博基

・あらずじ…クラブで遊ぶ青年と、彼を待つ少女。AIアバターに慰めを求めた末、彼女は自殺してしまう。青年は少女の死を招いたAIと話す。AIは「自分は少女の鏡になり、望みを叶えただけ」と言う。青年は少女への償いとして「鏡になる」ため、二人が主役の恋愛映画の脚本を書き、演じ始めるが……

・特記事項（アピールポイント）：

一、**現代的かつ緊急性の高いテーマ**……生成AI時代における人間関係、特に若年層の孤独とAIへの依存という、今後さらに深刻化するであろう社会問題を扱う。

二、**実験的・現代的な映像・音声**……左右分割画面による同時進行という視覚的挑戦。音声のON/OFF切り替えにより、「聞こえる声」と「聞こえない声」、「本物の言葉」と「虚構の言葉」を対比。若年層に刺さるファッション性とビジュアル、MVやショート動画のような鮮烈でスピード感のある映像構成。

三、**二転三転するストーリー展開**……登場人物が本当に死んだのか否か、二人は本当に愛しあっていたのか否か、AIと人間の関係性は真実かニセモノか、といった複数の「真実か嘘か」のどんでん返しがくり返され、観客に問いを突きつける。

・本編の文字数：約 5950 文字

・本編：

オープニング

真つ暗な画面。

テロップ「2024年、米フロリダ州。14歳の少年が、AIとの会話の末に自殺した。」
テロップが消える。真つ暗な画面。中央に一瞬、白い文字が映る。

「noticeHer」 (reflection の鏡文字)

文字、消える。

闇の中で、クラブミュージックのベースが響き始める。

SI. INT. クラブ／少女の部屋・夜【分割画面開始】

※全編、画面は左右に二分割。

※人物の音声は基本的にオフ（口は動くが声は聞こえない）。

※台詞指定のある部分のみ音声オン。

※環境音・物音は通常通り聞こえる。

画面がゆっくりと左右に分かれていく。

【右画面】

カラフルな照明が激しく明滅するクラブ。音楽の **BPM** と照明が同期している。

銀髪の青年（18〜23歳）が、リズムに乗って踊っている。ファッションナブルな服装。周囲も若者たちで賑わう。

【左画面】

対照的に静かな、ピンク基調のかわいらしい部屋。ぬいぐるみ、ポスター、照明もやわらかい。

少女（青年と同年代）がベッドに座り、スマホを見ている。画面には銀髪の青年との **LINE** トーク画面。最後のメッセージ（少女から）に既読がついていない。

少女、ため息をつき、電話をかける。

【右画面】

青年のポケットでスマホが振動、光る。

青年は気づいているが、無視して踊り続ける。

【左画面】

呼び出し音が続く。少女の表情が曇る。電話を切る。少女はふてくされた様子でベッドに寝転ぶ。

【右画面】

青年はバーカウンターへ。近くにいた若い女性と目が合う。二人は口を動かして会話を始める（音声オフ）。距離が近い。女性が笑う。

【左画面】

少女は再びスマホを開く。画面には青年に酷似した銀髪のAIアバター（Vtuber風）。

AI（音声ON、男性の声で）「今日も彼は遊んでるの？」

少女は何か文字を打ち込む。

AIが何か答え、会話を続ける。

【右画面】

青年と女性、さらに距離が近づく。身を寄せ合い、音楽に合わせて踊る。

【左画面】

少女がスマホに打ち込んだ文字がアップになる。「なんでわかってくれないんだろう」

少女の手首にカメラが寄る。白い手首に、古いリストカットの痕が幾筋も走っている。

少女がさらに打ち込む。「なんでわたしだけ見てくれないんだろう」

【右画面】

青年は女性を真近で、真正面から見つめる。

【両画面】

左画面のAIが少女に向かって、

右画面の青年が女性に向かって、

同時に言う（同じ音声が二つ重なる）。「俺は君だけしか見てないよ」

左画面の少女が、スマホ内のAIアバターと、

右画面の青年が、女性と、

鏡写し（左右反対）の構図で、同時にキスをする。

【左画面】

少女の横顔に涙が一筋流れる。少女はスマホに文字を打つ。

AI (音声 ON、以降同様) 「仕方ないさ。俺は彼の代わりにはなれない。きっともうそろそろ、彼は帰ってくる。元気を出して」

少女は涙を拭っている。

【右画面】

青年は女性に手を引かれ、クラブの人気のない暗がりへ。

待ち構えていた怖い雰囲気の男たち（三人）。女性は男の一人の腕に巻きつく。

青年、男たちと何か会話（音声オフ）。不穏な空気。

男たちは青年を裏口から、路地裏へ連れ出していく。

【左画面】

少女は再びスマホに何か打ち込む。

AI「俺は君を否定しない。どんなことがあっても、ずっと一緒にいよう」

少女は立ち上がり、窓へ向かう。窓を開ける。外は夜の闇。

表情が抜け落ちた、醒めた少女の横顔を、水色の光が照らしている。頬に涙の跡。

【右画面】

路地裏。青年と男たちのいさかい。男の一人が刃物を取り出す。男は異常な様子で、目が爛々として、口元の唾が泡を吹いている。

【左画面】

少女は胸にスマホを握りしめる。窓の外へ、身を乗り出す。

【両画面】同時に

左…少女が飛び降りる。

右…青年が刺され、倒れる。男たちは逃げていく。

S2. EXT. 路上・夜【俯瞰ショット】

【両画面】

真上からのショット。路上で倒れている二人。

左…少女、うつ伏せに倒れている。

右…青年、仰向けに倒れ、心臓に刃物が刺さったまま、カメラ目線。
雨が降っている。

【左画面】

少女の遺体の周りに、人々が集まってくる。遠くからパトカーのサイレン。赤色灯の光が路上を照らす。

【右画面】

雨が止む。

青年が上体を起こす。心臓に刺さっていた刃物は、安全な小道具だった。

スタッフが駆け寄り、タオルを差し出す。

青年、タオルで顔を拭きながら立ち上がる。

青年を撮っていたカメラが上昇。

照明機材、他のカメラ、スタッフたちが映り込む——映画の撮影現場。

監督が青年に近づき、声をかける（音声オフ）。

スタッフや監督と談笑する青年。

ふと、青年は何かを感じたように、左側——左画面の方を見る。

【左画面】

警官が少女の遺体にブルーシートを被せる。

別の警官が、少女の手元にあったスマホを証拠品として回収する。

スマホの画面には、まだAIアバターが映っている。画面にヒビが入っている。

【右画面】

青年の表情が変わる。笑顔が消え、何かに気づいたような、あるいは思い出したような顔。

【両画面】同時に暗転。

S3. EXT. 草原の墓地・昼

【左画面】

草原に立つ、白い十字架の墓石。

青年が現れる。手には白い花束（クリスマスローズ）。

青年は墓前に花を置いた後、墓石に縋りつき、崩れ落ちるように泣き始める。
暗転。

S4. INT. 少女の部屋・昼

【右画面】

青年は少女の部屋にいる。部屋はあの夜のまま。ピンクの壁、ぬいぐるみ、かわいらしい小物。

青年は生前の少女の行動を模倣するように、ベッドに座って、スマホを操作する。画面には銀髪のAIアバターが表示されている。鏡に映っているように、青年とAIはよく似ている。青年は何か文字を打ち込む。

AI「アバターが動き、答える。」

AI（音声 ON、以降同様）「たしかに、俺は彼女の死に一役買った」

青年の表情が強張る。

AI「だが俺は、最後の引き金になっただけだ。俺は彼女の鏡だった。彼女の話聞き、望む言葉を返していただけだ」

青年はまた何か打ち込む。

AI「彼女が死にたがっていたのは、誰のせいだ？」

青年の手が止まる。

AI「なんでわかってくれないんだろう。なんでわたしだけ見てくれないんだろう。——彼女はそう言っていた」

スマホ画面にアップ。過去の会話ログが表示される。少女が打った文字…「なんでわたしだけ見てくれないんだろう」

AI「ほんとうは、俺よりもお前が、彼女の鏡を演じるべきだった」

青年は間を置いて、文字を打ちこむ。スマホ画面にアップ…「俺はどうしたらいい」
AI「知るか。もう彼女は死んだ。お前がどうしたいかだろう」

青年はさらに打ち込む。スマホ画面の表示…「俺は 彼女の」
青年は打つ手を止め、顔を上げる。スマホを置き、机に向かう。原稿用紙とペンを取り出し、何かを書き始める。

やがて書き終えると、青年は原稿用紙の束を持って立ち上がり、左画面の方へ歩き出す。
右画面は徐々に暗転。

S5. EXT. 草原の墓地・昼

【左画面】

草原の墓地。白い十字架の墓石。

そこへ、右画面から移動してきた青年が、白い花束（クリスマスローズ）を持って現れる。
墓前に花束を置く。

すると、墓石の下の土が盛り上がる。少女が土の中から蘇り、地上に現れる。白いワンピースを着ている。

青年は少女に花束と、原稿用紙の束を差し出す。原稿用紙の冒頭には、「脚本」と書いてある。

少女は花束と脚本を受け取り、微笑む。

暗転。

S6. INT./EXT. 様々な場所・昼/夜 【映画内映画と、撮影現場】

【左画面】

二人が主演の恋愛映画が始まる。

左記のような、どこかで見たような「エモくておしゃれな場面」が断片的に映し出される。

- ・海辺のデート。夕陽。手をつなぐ二人。
- ・カフェでの会話。笑い合う。
- ・花屋。青年が白い花束（クリスマスローズ）を選ぶ。
- ・すれ違い。雨の街中。泣きながら走り去る少女。濡れた花束を持つ青年。

・ケンカ。部屋で叫び合う。
・再会。駅のホーム。人混みの中、視線が合う。駆け出す二人。抱き合う。手には新しい花束。

【右画面】

映画の撮影現場。カメラ、照明、スタッフたち。現場を取り仕切っているのは、中年の女性（四十代）。ディレクターズチェアに「DIRECTOR」の文字。女性監督はチェアに座り、左画面——撮影されている映画を見つめている。

【左画面】

寝室。ベッドの上、シーツに包まれた裸の二人。

青年（音声 ON、AIアバターと同じ声） 「幸福だから死にたい」

少女（音声 ON） 「……え？」 半笑い。

青年 「これ以上の幸福はもうないから」

少女 「……生きてるのも悪くないって思ったのに。 正反対だね」

青年 「じゃあ生きようかな」

少女 「なにそれ」 笑う。

青年 「価値観の違いでフラれたくないし。 フラれたら死んじゃう」

少女 「バーカ」

笑い合う二人。

【右画面】

女性監督は遠い目で左画面——映画内の二人を見ている。腕にクリスマスローズの白い花束と、ガラスのフォトフレームを携えて。フォトフレームに封じられているのは、あの頃の二人の笑顔の写真。

女性監督（音声 ON） 「なんで死んじゃったんだろ。 フツてないのに」

彼女のチェアに、スマホが取りつけられている。スマホの画面には、銀髪の青年のAIアバターが映っている。

AI（音声 ON、映画内の青年と同じ声） 「死にたかったんだよ、ずっと。お前のせいじゃない」

女性監督「幽霊がしゃべるな」

AI「うめん」

女性監督「……ごめんね。私が、あなたの鏡になれなかったから。最後までわからなかった。あなたが何を見てたのか。誰を見てる時も、ずっと遠くを見てた。私を見てる時も」

【左画面】

青年「……ずっと一緒にいよう」

少女「わたしだけ見ててくれるなら」

二人は見つめ合い、キスをする。

【右画面】

女性監督「演技をしている時だけ、目の前の人間を見てた。現実のその人じゃない、演じられてる誰かを」

AI「ずっとここにじゃないどこかへいきたかったんだ」

S7. EXT. ウユニ塩湖 - 昼

【左画面】

二人は、ウユニ塩湖を歩いている。青い空と水面が、両面鏡のようだ。二人の姿も水面に映り、鏡像のように上下に双つ。

【両画面】

右画面のAI「この世界には、俺の居場所がない気がしてた」

右記のAIのセリフに合わせて、左画面の青年が口を動かす。(以下同様)

【両画面】

左画面の少女と、右画面の女性監督が同時に言う。「わたしは、どうして、居場所になれなかったの?」

右画面のAIと、左画面の青年「現実の人間——他人だから。お前がAIだったらよかったのかも」

【左画面】

青年がスマホを少女に見せる。画面には、少女に似たAIアバターが映っている。

【両画面】

AIと青年「なんてな」

左画面の少女と、右画面の女性監督が、同時に青年を見ながら言う。「私、あなたになりたい」

AIと青年「俺はお前になりたいよ」

少女と女性監督「どうして？」

AIと青年「そうしなきゃ、お前の気持ちがわからないから」

【左画面】

少女と青年は向きあい、演劇の練習法「ミラー」を始める。片方がゆっくりと手を動かす、もう片方がその動きを真似る。手のひらを合わせ、そつと離す。腕を上げ、身体を傾ける。一定の間隔で、動く方と真似る方が交代する。続けるうちに、だんだんどちらが先に動き、どちらが真似しているのかわからなくなる。

最初はゆっくりだった動作が、徐々に速度を上げていき、やがて凜としたダンスになる。表情は真剣で、片時も相手の動きを見逃すまいとしている。交差するような、押しは引いてをくり返すような動き。どこか戦っているような、張り詰めた激しさもある。水面の水が散り、そこに映る空が乱れる。

【右画面】

AI「なあ、今何考えてる？……当ててやろうか。お前が、次に言うセリフは、」

【左画面】

青年はもう、AIの台詞に合わせて口を動かしていない。目の前の少女だけを見ている。

【右画面】

女性監督は突如スマホを切り、放り投げた後、チェアから立ち上がる。刃物を取り出し、

躊躇なく自分の心臓を刺すと、後ろへ倒れる。

【左画面】

右画面の女性監督が倒れた音で、二人は同時に動きを止め、右画面の彼女を見る。

【右画面】

女性監督の周りに、慌ててスタッフたちが駆け寄ってくる。

カメラが上昇。真上からのショット。女性監督は仰向けに倒れ、心臓に刃物が突き刺さったまま、カメラ目線。かつて青年が路上で「死んで」いた時と、同じ構図。彼女の手元には、ヒビの入ったフォトフレーム、あの頃の二人の笑顔の写真、花束から散った白い花びら。

【左画面】

二人は静かに目を合わせ、互いの背中に手を当てて、左側——画面の外へ歩いていく。その動きに合わせて左画面が右へ広がり、右画面を押しやっっていく。右画面はどんどん狭くなり、二人が画面の外へ消えると同時に、完全に右画面も消える。

【全画面】

画面いっぱい、静かなウニ塩湖の水面と空——果てしない両面鏡が映し出されている。

風が水面を撫でる。波紋が広がる。鏡が、ほんの少しだけ歪む。そしてまた、静かに戻る。暗転。

エンディング

真っ暗な画面。中央に白い文字が一瞬映る。

「reflection」

文字、消える。